

大阪市立大学見学報告書 (平成18年1月25日)

「文系学生に対する自然科学教育」の取組

まず責任者の飯尾教授（物質分子系）より、大阪市大の取組の総括的な説明を受け、その後地学の講義・実験の参観、地学・化学・生物・物理の実験設備の見学、担当者との意見交換という順で視察を終えた。以下はその報告事項である。

1) 実験設備は理工系学生と共用であり、その装置・実験室の広さ等、充実したものを利用

2) 各学科に実験担当の技術職員がいて、理工系の実験を含めてその準備に当たっている

3) 実験には担当者と TA があたり、技術職員は授業の支援にあたっている（助手はいない）

4) ・文系学生向けの実験を伴う科目「実験で知る自然の世界」は半期3単位である。

- ・これはオムニバス形式で11テーマの実験を90分×2コマで行なうが、内容は半分講義（2単位分）、半分実験（1単位分）という扱いである（3単位の位置づけとして）実質には実験が主

- ・実験内容としては、地学・化学・生物・物理からそれぞれ幾つかのテーマ（物理は、放射線測定・重力加速度測定・電磁波測定の3テーマ）を用意

- ・毎回の実験では、報告用紙や感想アンケートなどの記入が求められるが、レポートは11テーマのうちのどれか1つを選んで提出（A4、2-3枚程度）が義務付けられている

この実験科目の設置は1994年4月からであり、それは実験用の古い校舎が建て替えられて基礎教育実験棟がオープンした時とちょうど一致している。それは、大阪市立大学が教養課程を廃止して新教育課程に移行したときでもあった。

5) 各実験室の使用頻度は（理工系の実験も含めて）、週3～4日であること

この点は日吉の使用頻度が特別であり、多くの大学の実験室の使用状況と同程度と推定される。

6) ・全学向け（理系と文系学生半々）の実験を伴う科目「実験で知る自然環境と人間」は開設してから今年度で2年目である。

- ・「自然の世界」も「環境と人間」も1クラスずつで、定員48名（実際の履修者数は42名程度）である。

- ・ **文系4学部**（商・経・法・文、ちなみに慶應とは学部を呼ぶときの順番が違う）の **1学年定員800名**に対して、その約**1割が実験を伴う科目を履修**している。

（ただし、クラス増は教員の負担増になるため困難とのこと。）

大阪市立大学の実験担当者と懇談する中で、「文系学生に対する実験科目の教育目標は何か、またそれが達成されているのか」という議論が印象に残った。

基礎教育棟で行なわれている学生実験の内容に関し、大学内部向けには「情報発信誌」を発行し、外部にはホームページで一部が公開されている。